

使徒言行録 7章 39節～43節。「けれども、先祖たちはこの人に従おうとせず、彼を退け、エジプトをなつかしく思い、アロンに言いました。『わたしたちの先に立って導いてくれる神々を造ってください。エジプトの地から導き出してくれたあのモーセの身の上に、何が起こったのか分からないからです。』彼らが若い雄牛の像を造ったのはそのころで、この偶像にいけにえを献げ、自分たちの手で造ったものをまつて楽しんでいました。そこで神は顔を背け、彼らが天の星を拝むままにしておかれました。それは預言者の書にこう書いてあるとおります。『イスラエルの家よ、／お前たちは荒れ野にいた四十年の間、／わたしにいけにえと供え物を／献げたことがあったか。お前たちは拝むために造った偶像、／モレクの御輿やお前たちの神ライファンの星を／担ぎ回ったのだ。だから、わたしはお前たちを／バビロンのかなたへ移住させる。』」

ステファノは、奴隷生活から解放された出エジプトの奇跡とモーセがシナイ山で十戒を受け、命の言葉を伝えたことを論述した。荒れ野の40年間、神から計り知れない恵みを受けたことを力説した。ところが、それにもかかわらず、イスラエルの民は罪に陥っていった。「けれども、先祖たちはこの人に従おうとせず、彼を退け、エジプトをなつかしく思い」と続けている。民は、モーセに従わず、荒れ野での飢えと渇きを訴え「誰か肉を食べさせてくれないものか。エジプトでは魚をただで食べていたし、きゅうりやメロン、葱や玉葱やにんにくが忘れられない。今では、わたしたちの唾は干上がり、どこを見回してもマナばかりで、何もない」と泣き言を言った。奴隷の屈辱的な生活ではあったが、エジプトで食べた肉鍋を恋しがった。現在の苦しみが、神の確かな恵みを見えなくさせ、食べることができた過去への郷愁に向けさせたのである。

また、モーセがシナイ山に登り、なかなか帰って来ないことに不安になり動揺した民は、モーセの兄アロンのもとに来て「わたしたちの先に立って導いてくれる神々を造ってください。エジプトの地から導き出してくれたあのモーセの身の上に、何が起こったのか分からないからです」と訴えた。アロンは、民全員が着けていた金の耳輪をはずし、持って来させ、のみで型を作り、若い雄牛の鑄像を造った。彼らは「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上ったあなたの神々だ」と叫び、祭壇を築き、焼き尽くす献げ物、和解の献げ物を供えた。そして、民は座って飲み食いし、立っては戯れ、偶像礼拝の虚無に陥った。続いて、モーセの時代から500年ほど時代が下がった預言者アモスの言葉を語っている。アモスが預言したのは紀元前8世紀、イスラエルの王ヤロブアム二世の治世であった。北の大国アッシリアの衰退を期に、イスラエルは繁栄を謳歌していたが、支配者階級は奢り、横暴を極めた。アモスは、これを厳しく指摘し、正義と公平を行うことを訴えている。ステファノが引用したアモスの預言は二つの時代の偶像礼拝の罪である。モーセに率いられた40年間、真の供え物を献げることなく、偶像礼拝に走った。アモスの時代も、メソポタミヤの諸宗教が持ち込まれ、それらを担ぎ回り、その罪がバビロン捕囚の裁きを招いたと、偶像礼拝を批判している。偶像礼拝は不安と恐れに耐えられず、地上の何かを神として頼み、逆にそれらに支配されて、人間の尊厳、アイデンティティを喪失することである。ステファノはモーセ時代とアモス時代の偶像礼拝の罪を挙げ、ここから、エルサレム神殿を偶像化している本論に入っていく。